

## 山崎広太郎オーラル・ヒストリー

土肥, 勲嗣  
九州大学大学院法学研究院専門研究員

九州大学西日本新聞寄付講座  
九州大学大学院法学研究院専門研究員

<https://doi.org/10.15017/22988>

---

出版情報：政治研究. 58, pp.147-175, 2011-03-31. 九州大学法学部政治研究室  
バージョン：  
権利関係：



## オーラル・ヒストリー

山崎広太郎オーラル・ヒストリー

土肥勲嗣十九州大学西日本新聞寄付講座編

本稿は元福岡市長山崎広太郎氏の口述記録である。山崎氏は、九州大学法学部を卒業後、自民党職員を経て、福岡市議会議員、衆議院議員、福岡市長を務めた。九州大学西日本新聞寄付講座の溝越明、前田隆夫、法学研究院の出水薫、岡崎晴輝、そして土肥勲嗣は、福岡市政研究の一環として、山崎氏へのインタビューを計七回実施した（二〇〇九年四月二一日、同年六月二一日、同年六月三〇日、同年一〇月六日、同年一一月五日、二〇一〇年二月五日、同年四月二〇日）。本稿はその内容を活字化したものである。なお、インタビューには、山崎氏の政策担当秘書を務めた吉村慎一氏（福岡市職員）にも同席していただいた。また公刊に際しては、山崎氏、吉村氏の校閲を得た。記して感謝したい。（土肥）

### 第一期 政治家誕生

一九七二年四月、全国六市（横浜市、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市、北九州市）の政令指定都市に、福岡市が札幌市や川崎市と共に加わった。政令指定都市としての福岡市の基盤整備に着手したのは、進藤一馬市長（一九七二年九月―一九八六年一月）である。当時、福岡市の人口は八七万人（一九七〇年）である。それから一五年間で二六万人（一九八五年）へと、およそ三〇万人増えている。一般会計規模は年々増加していく右肩上がりの時代であった。

山崎広太郎は、一九四一年九月三日、朝鮮全羅北道全州府（現、韓国全羅北道全州市）で生まれた。父親の郷里である島根県大社町（現、出雲市）へ引き揚げ、翌年、母親の親戚をたより、福岡市の郊外である筑紫郡春日村（現、春日市）に転居する。地元の春日村立春日東小学校、福岡市立三筑中学校に進学。中学時代に父親が蕎麦屋を開業し、本人も家業を手伝いながら学校に通う。福岡県立修猷館高等学校、九州大学法学部を卒業後、自由民主党の職員となる。一九七一年四月、山崎は福岡市議会議員選挙（大選挙区）に立候補し、初当選する。

## 【自民党職員】

——大学卒業が一九六五年ですから、日韓条約の年になりまずね。日韓条約には反対の立場でしたか。

山崎 卒業してすぐ自民党に入った。立場としては日韓条約推進派。なぜ日韓条約が必要かということ、自民党職員として九大の教養部で行なわれた政党討論会にも出させられた。そう知識はなかったけれども、一生懸命だったせい、か、学生が意外に声援を送ってくれた。

——大学卒業後すぐに自民党に就職するのはかなり特殊ですよね。家業を継ぐとか就職活動をすることはまったく考えなかったのですか。

山崎 企業は一社も受験していない。卒業が翌年の三月だとすれば、前の年の夏くらいには自民党に入ることを決めていた。秩序も大事だとか、そういう気色になったわけだ。

——秩序も大事だという気色とはどういう意味ですか。

山崎 デモは当然参加すべきだ。大きな権力には学生が立ち向うべきだと、そういう理屈で行動していた。一方で、秩序を守るのも大変しいじゃないか、という思いもあった。私のなかでは自民党が政治の世界では一番身近であったわけです。社会党がよくわからない、特殊な存在だった。政治の世界を普通の世界にしよう。普通の常識をもった人が誰でも

も活躍できる世界にしよう。

それまでは積極的に学生運動とかデモとか参加していたので「おまえは一八〇度転換した」と言われた。自民党へは飛び込みだった。当時の自民党県連の幹事長と少しご縁があって、いきなり自民党に入って勉強したいと申し入れた。幹事長も戸惑って、どうしていいかわからん。「少し待って」と。

——当時としては珍しかったわけですね。

山崎 家が商売をやっているということもあった。三男だから、まったく拘束されない。兄貴から蕎麦屋と一緒にやろうと誘われたが、兄弟喧嘩になるだけだと思った。「俺は別の道を行こう」と。

——ご両親は反対しなかったのですか。

山崎 なんとも言わなかったですね。いや、なんかは言うたでしょうけど、私にとっては発言は微々たるものという感じだった。成績が悪いということもあった。どうせ企業を受けても受からんと。

——当時、街づくりとか日本の将来とかに想いをはせることは何もなかったのですか。

山崎 なんもない。

——政治的野心として、どの辺まで行きたいというのはあったのでしょうか。いずれ国政に出るとか。

山崎 それほど野心的ではなかった。そこまで読めなかった。ただ、僕らの年代までは、仕事というのは叩き上げが必  
要だ、雑巾がけから始めるのが当り前だ、というのがあった。  
その意味では気負いもなかった。

——政治家を目指す人は、政治家の秘書になることが多い  
ですが。

山崎 私くらの年代の人たちには、そういう人が多い。  
古賀誠さんなんかもそう。政治家の秘書になるというのは、  
あまり考えなかった。しかし、政治家の秘書もやった。僕が  
政治の世界に飛び込んで最初の恩師が柳田桃太郎さん（元参  
議院議員）。柳田さんは門司市長もしていて都市政策に精通し  
ていた。その柳田さんが参院選に出るといので、カバン持  
ちをやった。二人でずっと福岡県内を回っていた。

### 【柳田桃太郎】

——山崎さんの著書『水は関門海峡を渡れないか』に柳田  
桃太郎さんが推薦の言葉を寄せていますが、柳田さんとはど  
うにお知り合いになったのでしょうか。

山崎 自民党福岡県連の命令ですよ。「お前行け」と言われ  
て、柳田さんの選挙事務所に行った。自民党は剣木亨弘さん。  
社会党は指定席。公明党も力をつけてきた。一九六五年七月

の「七夕選挙」です。

——柳田さんからは何を一番教わりましたか。

山崎 ちゃんと仕事をするということかな。柳田さんは政  
治的な駆け引きとか、そういうことを得意とする人ではな  
かった。仕事をきちんと積み上げるといのは、あの世界で  
は難しいこと。場面、場面でうまくいけば評価されるし。何  
度も選挙をやると、選挙にならんと体も動かんし心も燃え上  
がらんようになる。終わったらボーっとしとる。何回もやる  
とそうなる。そうなつてはいかんと教えてくれた。それから、  
現状維持という考え方はダメだということ。都市は生き物  
だ。発展するか衰退するしかありえない。現状維持はありえ  
ない」というのが柳田さんの持論だった。やっぱり常に何か  
手を打っていく必要があるんだよな、都市というのは。

### 【政治家を志した動機】

——そもそも、なぜ政治家を志したのですか。

山崎 私は、政治を常識の通る世界にしようという想いを  
持っていた。当時はまともでないような人間でないと政治の  
世界では通用しない、というところがあったように思う。そ  
うじゃなくて、常識をもった人間がクレイジーじゃなく活躍  
できる世界にしよう、そうあるべきだ。特殊な世界ではなく、

誰もができる世界にする。「俺みたいな者でもできる」ということを実証しよう」と思ったわけだ。

私は演説は下手やし、そもそも口下手。政治の世界に行くと言ったら、私の同級生たちはみんな反対した。「お前が一番向かん」(笑い)。なかには賛成してくれたやつも何人かいましたけど。政治に向かないと言われる人間が政治の世界に入ってみよう。私はひそかに「俺は向いとる」と考えたわけです。

——周りが向かないというのに自分は向いていると思うのは、ある意味すごいですね。

**山崎** しつこいですよね(笑い)。ひそかに「俺は向いていく」と考えた根拠は、弁舌さわやかではないが、考えをきちんと整理できるということ。法律家としては落第だけど、物事の本質を掴む直感は冴えている、このことで勝負できると考えていた。自分を見失わずにやっていこうというところは、わりとあった。

#### 【自民政務調査会】

——自民党福岡県連に就職されて半年後に党本部に移ったわけですが、「この人はすごいな」という政治家はいらっしゃいましたか。

**山崎** 田中角栄はすごかった。当時、自民党幹事長だったが決断が早かった。また古いタイプの政治家で僕らにまで歳暮をくれたりしよった。僕は政調におつて、大平正芳さんから直接仕事をもらつたことがあつた。彼は政調会長だった。こういう見方でやるんだと教わつてね。過去一〇年の自民党の功績を数字で表せ。なんでもいいから探して来い」と言われて、一生懸命やつた。公衆電話の数とか、生活環境がどう変つたかを数字で表わすために苦心した。

——その頃は、自民党危機論が唱えられていましたね。

**山崎** 社会党は当時からたいしたことはないと思つてた。ただ、絶対安定多数ではなかったから、危機感を持つていた。いつの時代でもそうかもしれないけれども。

——政調の時代に担当されたことは何ですか。

**山崎** 政務調査会は部会ごとに分かれていて、私は商工部の担当だった。通産省、経済企画庁の予算、法案の党内でのとりまとめが仕事だった。一方で総合政策研究所の所員でもあつた。そこでの仕事は主に対外経済協力特別委員会、当時は元日銀総裁の一万田尚登氏が委員長で一万田委員会といわれていたが、その事務局をつとめた。

当時は、発展途上国に対する経済援助については、各省がバラバラにやつていて、それを一万田委員会できりまとめ、

特に予算要求などをやっていった。大変重要な仕事だと思った。

——当時、一緒に働いていた党職員で、後に政治家になった方はいらつしやいますか。

山崎 狭き門でしたね。党本部の優秀なやつは頭を抑えられる。当時は中選挙区でしょ。彼らも出身地を選んで手を挙げようとする。すると真先に抑えられる。それで私は、三年で見切りをつけて、市会議員から始めようと思った。当然、誰でも国会議員になりたいが、そんな夢みたいなことはまわり道をしないとできないと思つたわけだ。

### 【東南アジア】

——党本部勤務時代に東南アジアを訪問されていますね。

山崎 第一〇回総理府の青年海外派遣事業アジア東班に参加した。五〇日間で七カ国を廻つた。横浜から船で、香港経由でマニラへ。そこで上陸し、そこからは空路になった。フィリピン、タイ、ビルマ、インドネシア、台湾、韓国、そして帰国。アジアの原点を見せていただいたと思つている。今は、そういう機会は多いが、あの頃はなかなか海外に行けなかつたので良い経験になった。

### 【市議会議員選挙】

——党本部を辞めるきっかけは何ですか。

山崎 きっかけとなつたのは、私は、修猷館高校では山崎拓さんの五つ後輩。拓さんには二人の側近兼親友がいますね。朝日新聞の伊藤さんと出光興産の遠山さん。彼らが相次いで東京転勤になつた。そして東京で、この二人から説得を受けた。「お前、帰つてくれんか」と。拓さんは県議の一期生だったが、衆議院に出る話があつた。しかし、衆院選になると地盤が重なる進藤一馬さんを一生敵に回さんといかんから、私はずいぶん反対した。しかし主戦論が強く、結局、衆院選は私も事務局で戦つた。惨敗して、さてどうするか。当初の考え通り、私は市議に出た。

——初めて福岡市議選に立候補されたときは政令指定都市になる前夜ですが、当時の街の雰囲気はどうでしたか。

山崎 まだ生活道路は舗装されていないし、穴ぼこだらけで、砂利をいれるという状況。ちやうど一般会計の規模が一十億円になつた年なんです。現在は七千億円ぐらいかな。

——最初の選挙は、まだ全市の大選挙区ですよ。

山崎 新人も出やすかつた。それと定数が六〇でしょ。強いやつは圧倒的に強い。なんもせんでも通る。医師会とか青果市場とか労組とか、大きな組織を持つた候補者はね。とこ

ろが広すぎて、油断をするやつがたくさんいる。三分の一に当たる二〇人ぐらいが落ちる。今はほとんど入れ替わらないが、そういう意味では新陳代謝がよかった。

——大選挙区での戦い方はどうでしたか。

**山崎** いくつかの重点地域をおくことが大切。一カ所からどんと(票が)出ることは絶対にならない。地元長住(現、南区)の有権者は「やっぱり地元から出しとった方がいいな」と、それなりにまとまるが、これをだつと一つにまとめてしまうのは不可能。それで多少票がまとまりそうなポイントを絞って重点的に攻める。

——候補者調整は必要ないですよ。それから、自民党から公認は受けたのですか。

**山崎** 候補者調整はある程度やりよつたね。公認については、僕は初めから自民党だから、申請して公認をいただいた。最初のパンフレットには地元長住の新興住宅地の地域の課題をきわめて具体的に書いている。当時は珍しかった。

——アイデアは話し合つて決めたのですか。

**山崎** やっぱり参謀がおりましたね。選挙は面白いと思つてくれる人が必ずいるんよ。この状況のなかでこいつを当選させる。そういう参謀を自分で探すことが候補者の大事な仕事だと思ふね、特に新人の場合は、そういう人を見つけたし

て捕まえるというのが必要。

——参謀は年長の人ばかりでしたか。

**山崎** いや、参謀は私の同級生が中心だつたね。

——選挙に長けた人はいなかつたのですか。

**山崎** いない。選挙に長けた人は市会議員選挙なんかに関心を示さんわね。まつたくの素人が面白い。どうやって一人の市会議員を育てるか。経済力がそこそこある企業なんかやっている人だつたら、だいたい戦略は持つていらつしやると思ひますよ。

——当時、最年少候補者だつたようですが、それは前面に打ち出したのですか。

**山崎** 純情そうだとか。

——お金は結構かかつたのですか。

**山崎** 印刷物も、全市となると大変。どうだつたかな。百万円とか二百万円ぐらいだろうと思うけど。私の先輩のところで野ざらしになっていたプレハブを借りて事務所にしたり、そういうことをやっていたね。あの頃は特に貧しかったから。

——同窓会や友人以外に選挙を支援する組織はなかつたわけですよ。

**山崎** 参謀が企業経営者だつたから、一票、一票誰れ誰れ

の親せきとか読んでいった。そりゃ、すごい。九千票を読んだと言われている。だから全市でトップだと(笑)。津田隆士氏(市議会議員)の親父さん(元市議会議員)に言ったら、「それだけきちんと読んでいるなら、その半分だろうな」と言われた。その通りやった。四千五百票。真ん中からちよつと下の方だった。そういう選挙をやる先輩を見つけないといかん。それなら当選間違いない。

——当時は、自民党の派閥ははっきりしていたのですか。

**山崎** 自民党市議団は圧倒的に進藤派。私一人やなかったかな、山崎拓派というのは。進藤さんがずっと出続けていたら、拓さんは敵しかったでしょう。しかし、進藤さんも考えるところがあつて、市長にまわつた。

——山崎拓さんの応援はありましたか。

**山崎** それなりにしてくれていたとは思うけどね。ただ、彼も県議選や衆院選でいろいろな人から支援を受けているから、そう動けるものではない。

## 第Ⅱ期 市議会議員・市議会議長時代

山崎が福岡市議、市議会議長として活躍した一九七〇年代から八〇年代は、ちょうど日本の高度経済成長期と重なり、

福岡市が財政的に比較的余裕があつた時代である。人口も七五年に百万人を突破して、それ以降も年々増え続け、九州の中核機能都市としての都市基盤整備が進められた。

七二年に政令指定都市となった福岡市は、七五年三月の山陽新幹線博多開業で東京まで六時間五六分で結ばれたことで東京圏や関西圏との交流が広がり、九州の玄関口として経済発展に弾みがついた。七六年には天神地下街(長さ三六〇メートル)が完成、天神地区を中心に商業施設やオフィスの入ったビルの建設が相次いだ。七九年には市民の憩いの場となっている大濠公園の敷地内に郷土出身の作品などを所蔵した市美術館が開館、九〇年には早良区のシーサイドももち地区に市博物館も開館した。

七九年に中国・広州市と姉妹都市となった福岡市は、八二年にフランス・ポルドー市、八六年にニュージーランド・オークランド市とも姉妹都市となり、国際交流にも力を注いだ。八七年に策定した市基本構想の中で「活力あるアジアの拠点都市」を掲げ、八九年には三七の国・地域が参加した「アジア太平洋博覧会」(よかトピア)が開催され、それ以降、約四〇カ国・地域の子どもたちを招いての「アジア太平洋子ども会議・イン福岡」が毎年開かれていく。

一方で、急速な都市化によって水不足や交通渋滞などの問

題も起きた。七八年には多くの市民が延べ二八七日間もの給水制限を強いられた「福岡大湧水」を経験、水不足の危機が緩和したのは八三年に筑後川から受水できるようになってからだった。また、市内の交通渋滞を緩和するために六九年間の歴史を持つ路面電車が七九年に全線廃止となり、代替交通機関として八一年に市営地下鉄一号線室見―天神間が部分開業、八三年には地下鉄姪浜―博多間が開業。八六年には市営地下鉄二号線中洲川端―貝塚間が開通した。

山崎が「水は関門海峡を渡れないか」を出版したのは八一年。水資源に恵まれない福岡市に島根県の江の川、高津川から関門海峡を越えて水を持ってこようという「遠隔導水計画」で、水不足解消の大胆な提言として話題を呼んだ。この本の後半では「ミニ地下鉄の構想」も取り上げ、市の西南部に計画されている地下鉄三号線について、採算性の面から「ミニ地下鉄」の建設を強く促した。この建設をめぐるのはその後、さまざまな論議が行われたが、三号線（七隈線）はミニ地下鉄方式で二〇〇五年に開業、山崎の提言が生かされたかたちとなった。

#### 【市議会議員新人時代】

――初めての質問は覚えていますか。

山崎 たいしたことはなかった。水道の一八条方式についてが初めての質問。水道の配管を延ばすのに、一戸当り百万円の補助金が出て、あとは自己負担。ちよつと批判的な質問だったと思うけど、あんまり問題にされなかった。木で鼻をくくったような答弁をされた（笑い）。おたおたしちゃって。年に一回くらい本会議場で質問をしようと思うけどね。

――自民党市議団のなかでも最年少ですよ。雰囲気はどうだったのですか。山崎さんを育てようという雰囲気だったのですか。

山崎 珍らしがられたね。知らん世界で「飯食い行くぞ」とか「これに頼め」とか。九大の卒業生やといって、部長、局長クラスが集まってきた。初めて九大卒の市議員が出てきたので、面白がってくれた。

――最初の選挙でパンフレットを作ったとおっしゃいましたが、実際に達成できたのですか。

山崎 今でいうマニフェストを作った。たとえば街路灯を増やす、舗装するとか。いろんなことを具体的に例入りで記した。もちろん、ほとんど実行できた。

私の地盤は、長住という新興住宅地。長住というのは住宅公団が区画整理をした。その減歩によって生まれた野球場があるが、地元の人が使えない。「おかしいじゃないか。それを

開放しろ」という声があった。それが一番難しかった。野球場を格下げして最終的にはソフトボール専用球場ということになり、役所が今でも管理している。

そういうことが一期目の仕事。経済が右肩上がりだったから、僕らもやりやすかった。生活道路も舗装を始めた。市役所は地元の市会議員さんに舗装の順番まで相談しよった。眼の前の道路が舗装されたら、その人はいつべんで支持者になってくれる。こんなわかりやすい話はない。それで二期目の選挙は楽だった。

——今のように限られた予算の分捕り合戦ではない。

**山崎** そう、予算が三割、四割という勢いで増えていく。

ただ、課題も多かった。どんどん都市化が進み、小学校や中学校を毎年四校も五校も新設しないといけないなかった。

——一期目は大選挙区だったので地元の長住校区の周辺部でも活動されたのですか。

**山崎** 都市化の時代で地域の自治会長と組んで様々な問題に取り組んだ。例えば大橋商店街の活性化など若い店主と共に取り組んだ。道路・下水・学校など大変だったが、地元の活動ではプラスになる。印象的なのはちょうど郊外の住宅地の中にマンションが建つということで、私が特にやったのは日照権問題だった。この問題は私がトップを走っていた。

——道路整備のとき一年生議員のところにも話を聞きにくる。財政問題はまったくなかったのですか。

**山崎** はしりのころはやっぱり厳しかったと思うけど、だんだん経済成長期に入って税金が伸びていく。九月に大幅補正、二月に大幅補正という毎年だった。

### 【市議会の会派】

——議会では緊張感がありましたか。

**山崎** あったね。当選した頃は、与野党が非常に拮抗していた。一年生議員だから、私が折衝をやるわけではなかったが。

——自民党の会派では年功序列はあったのですか。役職が回ってくるのは何期くらいからなのでしょうか。

**山崎** やっぱりあったよ。役職が回ってくるのは二期、三期でしようね。しかし、役職をやれん人もいる。性格的に向き不向きがありますけど、小さな世界だから人間関係で決まりますね。

——自分が議員らしくなると、お感じになったのはどれくらいたってからですか。

**山崎** 三期目のときはかなり自信もったね。一期、二期は一生懸命やっていた。

——他の会派との関係はどうでしたか。

**山崎** 野党とは拮抗してましたよね。一名差とか。公明党も野党だったのかなあ。

——保守系の会派である福政会の存在はどうですか。いまの位置づけと変わらなかったのでしょうか。

**山崎** 変わらないと思います。非常に安定していて、二つ足せば過半数。七三年に福政会の渡辺茂——副議長を二期も務められた実力者——が議長になった。福政会そのものの数は足りなかったが、自民と福政が組んでそれで議長になった。

——福政会との関係はどうだったのでしょうか。

**山崎** 福政会とはびったりしていた。不信感とかはなかった。しかし、一緒になるという話はなかった。やっぱり、福政会には「我々は無所属なんだ」という気概があった。

——社会党とは議会運営とかで、交わる機会があると思いますが、

**山崎** 社会党は、建前は一応、野党ということを買っていました。強く反対するか、そうでもないかの違いですね。採決になると反対票になる。論客も多かった。それぞれの委員会になると、かなり影響を持っていた。

——五五年体制では、片手で握り合って片手で殴りあっているといわれましたが。

**山崎** その必要性はなかったね。裏で手を組まなければ、という場面はなかったように思う。私が知らなかっただけかも。

#### 【政治家としてのテーマ】

——当選後、「自分はこのテーマに長く取り組もう」というテーマが見つかったのはいつ頃からですか。

**山崎** 議員になった頃、青年会議所の活動にも参加した。たしか、元福岡シティ銀行頭取の四島司さんが福岡青年会議所の創立十周年のときに「人間都市宣言」を提言した。これは、私にとって非常に感じる場所があった言葉だった。全国多くの都市が工業化を模索しているときに、「人間都市」というスローガンは非常に魅力的。そういう意味では、福岡が都市としてどのように発展していくべきかというのが、私の政治家としてのテーマだったような気がするな。

——工業都市である北九州市とは異なる都市づくり、という意識は持っていたのですか。

**山崎** 当初は色々な意味で北九州が先輩だった。福岡は商業や中枢管理機能で二市の連携という考えはあった。

## 【水不足解消の提言】

——『水は関門海峡を渡れないか』という本を八一年に出版されていますが、水問題に関心を持たれたのは七八年の福岡大湖水を経験してからです。

**山崎** 水が弱点だった。進藤一馬市長の時代から毎年、雨ごいを行う水源祭というのをやってきた。水問題については神だのみをする程、非常に心配してきたと思う。

——濁水騒動の後、大河の筑後川から水を引いてくるといふ福岡導水の問題があつたが、当時の記録を見ても、福岡市議会の動きは載っていません。

**山崎** 筑後川流域の人々にとつても大切な水を頂くわけだから、(市議会として)神経を使っていた。あんまり大きな顔をして動けない。私も動いた記憶はない。筑後川の水をどうするかというのは大変大きなテーマで、福岡市というよりも九州全体で取り組むような話だった。

——この本に出てくる「水源を島根県に」という構想は、どなたの発案だったのですか。

**山崎** 遠隔地から水を運んでくるという構想を発案したのは私。私の出身が島根県で、あそこでは河口のきれいな水がほとんど利用されないまま海に流れていた。島根県側からなら、水ももらえるだろうという読みもあつた。当時の島根県

議会の副議長が、参議院議員(当時)の重鎮・青木幹雄さん。私の親戚で、いとこ同士が結婚している関係。その青木さん——「みきさん、みきさん」と呼んでいるんですけど——に話をすると、「いいよ、俺が応援しちゃう、島根県議会が応援しちゃう」となったわけだ。

——大胆と言えば大胆。一つの都市の市議の発想としてはスケールがでかいですね。

**山崎** ムチャクチャやろ(笑い)。

——熊本県の球磨川から水を引くという発想はなかつたのですか。

**山崎** 鹿児島も水不足なので球磨川は期待できないと思つていた。『水は関門海峡を渡れないか』という表題は、当時、福岡市水道局にいた藤井利治君が考えたもの。一緒に勉強しよつた仲間だ。

私は、水というのに非常に関心がある。だから市長になつて最初にやつたのは水源地回り。福岡市内だけでなく、筑後川流域の関係先などを全部回つた。

現在、福岡市の水事業は海水淡水化も加わつて随分足腰は強くなった。福岡都市圏の結束が固いのも水だ。

### 【アジア太平洋博覧会の開催】

——八九年にアジア太平洋博覧会が開催されましたが、そのアイデアはどこから来たのですか。

山崎 この都市も博覧会をやっていた。だが、福岡市は戦後、一度もやっていなかった。(博覧会ブームの)盛りは過ぎた頃だったんだけど、「やろうや」ということで市議会の方から進藤市長の公約に盛り込んで踏み切ったわけだ。

——「アジア太平洋」というキーワードは、どんなところから浮上したのでしょうか。

山崎 青年会議所で博覧会の提言をやってきた。テーマはいろいろ。「アジア太平洋」というのは、最終的にはどこが決められたのかなあ。

——アジアという視点は、「大アジア主義」を掲げた福岡の政治結社、玄洋社的な風土、文化から来たものですか。

山崎 アジア太平洋の国々の参加を意識したことから生まれたものと思うね。アジアというのは常に意識してやってきた。私は市議になる前、二四、五歳の頃だったと思うが、東アジア地域の七カ国を五〇日間くらいで回った。いずれにしても、福岡というところはアジアとの結びつきの強いところだ。だが、私たちが「アジア太平洋」というネーミングを出せたかという点、ちょっと自信がないなあ。

### 【市議会議長・全国市議会議長会会長時代】

——市議会議員としてのキャリアを積んでいく延長線上に市長を想定されていて、当然通る道としての議長になられた。議長になったらこうしたいという意思を持って、議長になられたのですか。

山崎 政策的にどうのこうのはなかった。円滑な議会運営である必要はないが、ギクシャクしてもいいから活発な議論になるよう心掛けた。

——市議会は、実際に変化したのでしょうか。

山崎 議長になって五、六年目だったと思うが、自民党の若手の一期生、二期生の市議たちにハートフル法の条例版を議員提出条例で出させようと働きかけたことがある。「福祉のまちづくり条例」として条例案づくりに乗り出したが、当時は議会事務局には政策法務の力がないから、市の執行部に相談する。そうすると、「議長が何を言いだしよるか」となって、結局、議員条例づくりはうまくいかなかった。

——議長時代には、アジア太平洋博覧会が開催され、港湾の埋め立て計画が進みましたが。

山崎 私の選挙区は内陸部の南区だったから、港湾を知らんやった。そういう意味では、広い展望を持った市議会議員ではなかったと思う。港湾に関わるようになったのは、議長

になつてからですよ。しかし、一番面白いのが港湾ですね。数字が出ますから。

——数字が出るというのはどういう意味ですか。

山崎 たとえば、コンテナの取扱量とかね。

——ある種の経営者的な感覚ですか。

山崎 そうですね。

——市議会議長時代は、プロ野球の誘致運動に熱心に取り組んだそうですね。

山崎 福岡青年会議所のメンバーが中心になり、プロ野球の九州誘致運動を始めた。ちょうど一九七八年にライオンズが九州を去つて十年近く空白があった。福岡には適当なスポンサーがない。周辺は「とても誘致は無理なんじゃないか」という雰囲気だった。でも、青年会議所を中心とした運動が熱心だったので、福岡市議会も全会一致でプロ野球球団誘致を決議、八七年九月には「市民球団誘致市民会議」の設立に漕ぎつけることができた。私も子どものころ、親に連れられて平和台球場で野球を見た記憶があったから、「親子で見ようプロ野球」をキャッチフレーズに誘致運動を展開した。

市議会議長だったので、先頭に立って各球団に「ぜひ九州にきてほしい」とお願いして回った。その中で応じてくれたのがロッテ。当時のロッテの役員にも会つて話をした。「ロッ

テ誘致運動」はかなりいいところまで行つたが、結局は潰れた。幸いダイエーがホークスを買収し、本拠地を福岡に構えてくれることになつたので、誘致運動は成功した。九州がきっかけになつてその後、札幌や仙台も球団誘致に成功したが、プロ野球球団は分散し、それぞれの地域にとって大きな財産になつた。

——議員時代を振り返つて、国の関与を感じましたか。

山崎 八九年に全国市議会議長に就任した。そのとき、全国各地の自治体を回つたが、国は市町村のことなんか考えておらんね。さまざまな場面で、中央省庁が地方のことに口を挟んで、介入してくる。自治体で決めることなのに、何事も国が主導しようという「舞台回し」も見えてくる。分権がどうしても必要だと思ひましたね。

——分権を意識し始めたのは、全国市議会議長会会長になつてからですか。

山崎 考えとしてはあつたが、発言し、行動を始めたのはそうですね。

——全国市議会議長会の会長というのは、どんな雰囲気です。決まるものなのですか。

山崎 議長連中の話し合いで、おのずと決まります(笑)。札幌市議会議長の吉野晃司さんがもう一期やりたいと言いだ

したらしいが、九州からは私を出そうやという雰囲気だった。九州の議長連中は非常に仲が良かった。福岡市からということとで結束してくれた。だから吉野氏が降りて、無投票になった。地方六団体の一つだから非常に大事にされる。ちょうど天皇がお隠れになったときで、葬儀などには地方の代表として参列した。

### 第三期 知事選から国政へ

山崎は、一九九一年の福岡県知事選に無所属で立候補し、三選を目指す奥田八二(社会党、共産党、社民連推薦)、重富吉之助(自民党推薦)と三つ巴の戦いを繰り広げた。しかし、落選の憂き目に遭った。折しも、中央政界では「政治改革」の嵐が吹き荒れていた。一九九三年六月には宮澤内閣不信任決議案が可決され、解散・総選挙に突入。山崎は、同年七月の第四〇回衆議院議員総選挙で日本新党から立候補し、中選挙区制下の福岡一区でトップ当選を果たした。二位の山崎拓に約七万票もの差をつける圧勝だった。衆議院では、日本新党の議員会長を務めた。また、地方政治出身者として、地方分権推進法の成立に尽力した。だが、一九九六年の第四一回衆議院議員総選挙では、小選挙区制下の福岡二区から立候補

し、自民党の山崎拓に敗北を喫した。山崎拓の約九万八千票に対し、山崎広太郎の得票は約七万三千票にとどまった。重複立候補していなかったため、比例代表での復活当選もできなかった。

### 【知事選】

——どうして県知事選に出馬することになったのですか。

山崎 革新系の奥田八二さんが三期目を目指していて、一年以上前から、次の保守系の候補者を探していました。奥田県政は停滞している。だからといって、福岡市が困ったというわけでもないが、保守系としては「何とかせないかん。これじゃいかん」と。しかし、受け手がいないんですよ。「やっぱり奥田さんは強い。敵わない」と、官僚も手を上げない。時間はどんどんなくなっていく。しかし、誰かがやらんといかん。まったく脈絡がないけど、私が手を挙げた。私には一つの作戦があったんです。「市町村議員で選挙戦を戦おう。どの市町村も過半数は保守系だ。ここがしっかりやれば勝機はある」と考えたわけです。

——立候補を決断するとき、どなたかに相談されたのですか。

山崎 いや、していない。だいたい相談しない。答えがわ

かつとるから。

——議長まで昇りつめて限界を感じたということもあった  
のでしょいか。

**山崎** それもあるよね。もう任期が来春で終わる。議長やつたら、後は長老やからね。生き方を考えないといけない。

——県知事選では、自民党は分裂しましたね。重富吉之助さんは、自民党本部が送ってきた候補者だったのですか。

**山崎** そう。結局、無理やり抑えつけられて。その条件が私との一本化やつたんですね。その当時、小沢一郎・自民党幹事長とかと、何回も会いましたね。何度も説得された。

——地元が福岡市議会議長で一本化すれば、党本部は推薦したのではないですか。

**山崎** その時点では、党本部に任されていた。しかも私が正式の候補者になっても戦えるかな、という感じでしたね。

——市議會議員時代には県政との関わりはなかったのでしょうか。

**山崎** まったくない。知事になつたら大変なことになる  
なつていたと思う（笑い）。

——接点も関心もなかった県政に行くのは、ものすごく  
ハードルが高かつたのではないでしょいか。

**山崎** 選挙は選挙だから。実際、九七市町村（当時）を回

るのは大変だった。私が一番出先の選挙事務所を沢山つくつた。ものすごく広い。一人の人間ではいかんともしがたい。

**吉村（当時の議長秘書）**

市議会の議長さんが推薦状をだして決議をしていく。市議会レベルでは一枚岩。あのときは県連と党本部と上下分裂。そういう意味で、下から押し上げる力があつて、引くに引けない。北九州も含めて推薦決議が続々とあつていましたね。

——市議会内部、自民党内部の反応はどうだったのですか。

**山崎** 呆れとつたろうね（笑い）。それでも応援はしてくれた。

——当選しなかつたらどうするか、次のことは考えていた  
のでしょいか。

**山崎** 次のことを考える余裕はなかった。「敵しいな」というのはあつたけれども。とにかく、降りない、最後まで戦い抜く、というのが目標。お金とか、いろんな圧力とかで断念することはしない。最後までやりぬく、がんばる、という感じでやった。

——引き下ろし工作があつたのでしょいか。

**山崎** ただ、私を降ろして一本化しても負けるだろうというのがあつた。小沢一郎さんとも二、三度会つたが、最後に会つたのは年明けだった。「小沢さんならどうしますか」と訊

いたら、「俺もやるだろうな」とサジを投げた感じだった。正月には、竹下登さんからも呼ばれた。正月の一日に乗って東京に飛んだ。「福岡一円に自民党の旗が立つ。そのなかではやれんはずだ。だから降りろ」と。「降りたら、残務整理は全部してやる」という話だったけれども、お断りしました。

——決意は揺るがなかったわけですね。

山崎 そりゃ、そうだろ。

——自民党幹事長や元首相が直接働きかけたということ、福岡県知事選を重視していたわけですね。

山崎 ただ、彼らも半信半疑だった。山崎広太郎を降ろしたら勝てると思っていたら、もっと目の色を変えているよ。そりゃ、なりふり構わず抑えにかかるやろうね。私の身内も含めて。

——重富さんの事務所とは雰囲気違った。大人数ではなかった。

山崎 応援弁士になってくれる人が少なかった。とにかく一人で長くしゃべらないといけない。最低三〇分はやった。普通は、候補者は短い持ち時間しかない。次の会場に行かないといけない。一時間も話すのは大変やったな。

——当時の選挙のアピールポイントは何ですか。

山崎 「YES! YOU YOUNG」。山崎のY。

——政策的に際立ったものを打ち出しましたか。

山崎 「元気で豊かな福岡県」一本だったと思いますね。

——結局、落選したわけですが、票数は事前の予測とは違っていましたか。

山崎 あまり予測していなかった。票読みとかは不得意。覚えてもいないし。困ったのは、開票が始まった時は北九州で挨拶まわり。これから福岡の事務所へ入って結果を聞こう、という段取りだった。が、北九州で落選が決まってしまった。開票率一パーセントで当確を出すとは何事か、と。往生した。北九州でつかまってしまった。だから多かったのか少なかったのか分析もあんまりしていない。

吉村 三六万一四四〇です。一日中、どしゃぶりの雨でしたね。

——知事選直後、身の振り方はどのように考えていたのですか。

山崎 建前では知事選をもう一回やると考えていた。選挙区が広く、物理的には難しかったが、コツコツまわっていた。ただ、当選するという確信はまったくなかったですね。

——自民党内に生じた亀裂を修復する作業が必要だったのではないですか。

山崎 自民党はまとまっていたので、亀裂といえるほどの

ものはなかった。

——処分はなかったのですか。

山崎 処分はなかった。党籍もそのままだった。選挙に出る出るな、ということもなかった。無視。県知事選で重富氏を上回ってれば、大変だったろうが。

### 【九三年総選挙】

——竹下派の分裂は、福岡にも影響を与えたのでしょうか。

山崎さんは、個人的には竹下登さんと親しかつたはずですが、山崎 そもそも福岡には竹下派の衆議院議員はいなかった。その影響はなかった。あそこで出馬したのは、福岡一区の定数が五から六になったということが大きい。現職と争う必要がないわけだ。それと、地方分権のために国会で働こうと思つた。国会では、すべて地方行政関係の委員会に属した。

——日本新党から出馬されたわけですが、細川護熙さんからアプローチがあったのですか。もしそうなら、接触の時期はいつだったのですか。宮澤内閣不信任決議案が可決される前だったのですか。

山崎 そうです。細川さんから何度も強くアプローチがあった。直接会つたこともあるし、人を介したこともある。ただ、接触の時期は覚えていないな。

——細川さんは、なぜ山崎さんにアプローチしてきたのでしょうか。地方分権ということもあつたのでしょうか。

山崎 勝てそうだと考えたからかな。地方分権ということもあつたのかな。その辺のことは、あまり記憶にない。

——すぐに決断できたのでしょうか。

山崎 いや、何度も会つたということは、すぐには決断できなかったということ。ただ、知事選に再挑戦するには厳しい環境だったので、衆院選以外の選択肢はなかった。

——決断するにあたつて、日本新党に勢いがあることは分かつていたのですか。

山崎 いや、そこまでは分からなかった。だいたい、過去の新党は必ずしもうまくいっていなかったからね。

——自民党を離れることに複雑な思いはなかったのですか。

山崎 あんまりなかったなあ(笑い)。知事選に出馬したことで、自民党の政治家としては終わってしまったから。

——衆院選の際、日本新党から資金援助はあつたのですか。

山崎 ほとんどなかったのではないかな。日本新党にはあまりお金がなかったからね。組織づくりもしないまま、何も分らないまま、ワーツという間に終わってしまった。

——あのときの選挙には高揚感がありましたね。

山崎 そう、すごかった。あまりお金もなかったし、組織づくりもできなかった。しかし、知らないところでも手を振ってくれる。公示後、すぐに手応えがあった。

#### 【国会議員として】

——いきなり与党になって、「今どこにいるんだろう」という感じにはならなかったのですか。

山崎 そうね。こういうふうには政権交代が起こるのか、という感じだった。与党にはなったが、ただ、官僚政治だから官僚はとにかく説明が細かい。こっちはチンプンカンプン。官僚も啞然としただろうが、こちらも啞然としたね。

——最大の課題だった「政治改革」については、どのようなお考えでしたか。

山崎 推進派だった。かなり先頭にたった。本会議場で賛成討論もした。しかし、一番熱心に取り組んだのは地方分権。機関委任事務の廃止のとき、中心人物の一人だった。細川さんはもっと徹底的にやるべきだと言ったが、最終的に自民党と妥協した。そのときの三人くらいの提案者の一人になってとりまとめた。

——分権に関心をもったのは市議としての経験があったからですか。

山崎 もともと市議の時代から分権に関心があった。県知事選で落選して、アメリカ国務省のビクターズ・プログラムでアメリカに行った。四〇日ほど滞在したが、そのときの私のテーマは連邦政府と州政府との関係だった。実際、州政府が強く、連邦政府は州のサロンのようなもので、州が中心だという話を各地で聞いて非常に勉強になった。日本についていえば日本は南北に非常に長い列島で、気候も風土もちがう。中央で一律に決めるはうまくいかない。むしろ地方の力をそぐ。幸い、福岡は東京から一千キロ離れているから、東京ではなくアジアをみて仕事をする。そういうことが根本にあつて「分極化」も必要と言ってきた。それぞれの地方が特色をもって独自の道を歩むことが国全体の活性化につながる。ただ、どこの国をみても、わりと中央集権なんだよな。イギリスでもフランスでも。だから、他の国は教科書にならない。日本独自の分権的な体制・手法を作り上げなければならない。

——国会議員として福岡市政との関わりはあったのですか。

山崎 あまりなかった。ペテランの国会議員もたくさんいるし。まあ、役に立たないと思われていたんだろうね(笑)。僕は議員提出法案をやるとういう気はあった。市議会議長のときに失敗した福祉のまちづくり条例を国でやろうと思つて

動いていたが、建設省もハートビル法をやるうとしていた。建設省側から取り下げるよう圧力がかかってきた。周りの議員も一抜け、二抜けし、お手上げになった。立法権も中央省庁が握っている。まあ、日本は官僚国家だな。

——官僚国家だということは、国政に携わるようになって感じるようになったのですか。

山崎 そう、国で強く感じた。官僚は優秀だし、話せばわかる。清潔だし、公平だ。そこがよいところではあるが、自分たちの省庁の権限にかかわる問題になると絶対に守ろうとする。

——分権の際、自治官僚はどうだったのですか。

山崎 地方分権は政権の公約だからね。各省は、機関委任事務はすべて必要だ、と回答してきた。そこで、挙証責任の転嫁をやって、どうしても廃止してはいかんとするものをそちらで挙げるというやり方に切り替えたら、成功した。今、分権、分権と言っても、何も進まない感じだね。橋下徹・大阪府知事が行動を起せば、面白いかもしれない。

#### 【日本新党から新進党へ】

——日本新党の議員会長に選ばれましたね。

山崎 年長者だったからね。

——日本新党では、議員同士のつながりはあったのでしょうか。

山崎 新人議員が五、六〇人いて、それぞれの議員が細川さん以外は誰も知らなかった。松下政経塾関係者は別だが。それなのに急に細川さんが官邸に入ってしまったので、どうしようもなかった。まあ、最終的にはつながりもできたが。

代表幹事だった松岡満寿男さんとは、今でも仲が良い。

——一九九三年一月くらいから、小沢一郎（新生党・市川雄一（公明党）と武村正義（さきがけ）とのあいだの駆け引きが始まりましたね。

山崎 細川政権の官房長官だった武村さんは、あまり信用できないと思っていたなあ。さきがけの田中秀征さんもまだ政権は存続しているのに「細川は終わった」とか「旗がなくなくなった」などと言っていたな。細川さんも、さきがけのことをよくは思っていなかっただろう。

——小沢さんのほうが強引だったという見方もありますか。

山崎 まあ、どっちもどっちだったんだろうね。

——新進党に合流する際には日本新党からさきがけに行っていた人もいましたが、山崎さんは新進党以外に行く選択肢は考えなかったのですか。

山崎 まったく考えなかった。小選挙区制、二大政党制を採用したわけだから、新進党に行くのが当然だと考えていた。ただ個人的には、むしろさきかけに行つた人達と親しかつたんだよ。新橋の飲み屋にも呼ばれたしね。それはともかく、新進党を作るとき、僕らには、公明党、民社党を結びつける接着剤のような役割があると思つていたし、実際そういう役割を果たした。

——九六年総選挙では、その新進党から立候補し、自民党の山崎拓さんと戦いましたね。

山崎 拓さんは現職の自民党政調会長。個人の力では圧倒的な差があるので、政権選択を訴えるしかなかった。重複立候補も認められなかった。小沢さんは何でも決めてかかるんだよなあ。重複立候補は認めないと決めた。重複立候補していたら、拓さんとも戦いやすかつたのに。

——重複立候補が認められていれば、その後の人生はずいぶん違ったものになつたのではないですか。

山崎 きついで人生だつたかもしれないな（大笑い）。

#### 第Ⅳ期 福岡市長就任から退任、現在へ

一九八〇年代から福岡市は好景気の波に乗って大型開発事

業を推し進めたが、九〇年代後半になると、その是非をめぐる議論が活発になる。象徴的なのが人工島（アイランドシティ）事業である。

人工島事業は博多湾東部の四〇一ヘクタールを埋め立て、大型船が入港できる水深一五メートルの岸壁、住宅地や公園などを整備する計画で、総事業費は三九四億円。桑原市政時代に計画、着工された。だが、計画地が希少な野鳥の飛来地であることから環境破壊の批判が噴出。計画自体も景気の低迷、金融危機の荒波をかぶり、福岡市は見直しを余儀なくされた。

九八年一月の市長選は、人工島事業をはじめとする大型開発事業の推進か見直しが争点になり、「見直し」を掲げた山崎が四期目を目指した桑原敬一を破って初当選した。山崎は就任直後から大型十事業の点検に着手し、動物園移転や武道館新設などの撤回を決め、桑原市政からの転換を印象づけた。

しかし、懸案だつた人工島事業の見直しは難航する。山崎は事業規模を縮小せず、土地の活用法で新機軸を打ち出そうとしたが、中華街構想などが浮かんでは消えた。福岡市の港湾開発事業を担ってきた第三セクター・博多港開発の経営も悪化し、福岡市は、事業費を融資した金融機関の要請もあつ

て、博多港開発の事業の一部を肩代わりすることになった。市長選で訴えた「人工島事業は」引き返す勇気を持って見直す」というフレーズは、市民に「事業の凍結・撤回」のニュアンスを帯びて浸透したため、山崎の「見直し」への共感は大がらなかつた。

山崎が三期目を目指して立候補した二〇〇六年の市長選。争点となったのは、山崎が意欲を見せた夏季五輪誘致とメーソンの須崎埠頭再開発、そして人工島事業の見直しであった。八年前と攻守所変わって山崎は落選。吉田宏が新市長に就いた。

山崎は市長時代、大型事業見直しと併行して、二つの改革に取り組んだ。一つは「DNA運動」である。「DNA運動」とは、「できる」から始めよう、「納得」できる仕事をしよう、「遊び心」を忘れずに、という考え方をともに、頭文字をとってネーミングされた市役所の業務改善運動である。もう一つは、小学校単位の自律的なコミュニケーション活動の推進。前者は、これまで以上に市民を意識した仕事を職員に促し、後者は地域の自治活動や行政との「共働」の理念を広げた。

### 【大型開発事業】

——一九九八年の市長選は桑原敬一市長（当時）との戦い

で、人工島をはじめとする大規模事業をどう見直すかが選挙の大きな争点になりました。

山崎 市債発行が急激に膨らんだ時代だった。毎年一般会計で一千億を越す市債発行を行ない、このままでは早晚、財政破綻するとの危機感を持っていた。

——市長選で、人工島事業は「引き返す勇気を持って見直す」と表明していましたが、市長に就任すると、最終的には継続を決めました。

山崎 人工島事業も私にとっては大型事業の一つで、継続はやむをえないが、見直すことができる点があれば見直そうと考えていた。「引き返す勇気を持って」は事務所スタッフの作文。あれには最後まで往生した。共産党には「公約違反だ」とずっと言われ続けた。「引き返す勇気」なんて、ものすごい修飾語だった。

アイランドシティは、博多港近代化のために避けて通れない事業だったんですよ。埠頭を造り、大型船を入れるには博多湾の水深が浅く航路の浚渫をしないとイケない。幅員四〇メートル、深さ一四メートルの大規模な航路を造って、その浚渫土砂でアイランドシティが生まれた。僕は市議会にいたから、そういう経緯を全部知ってる。事業を止めるというののもつてのほかだった。でも、事業の点検はしなきゃいか

んと思っていた。

——事業計画を縮小しようとは思いませんでしたか。

吉村 地盤改良の工法をかなり工夫して、百億単位で事業費を減らした。実質的な点検作業はできたとと思う。

——港湾事業は、大手マリコン(マリン・コンストラクター)の影響力が強いと聞きます。事業の見直しに対して圧力がかったことはなかったのですか。

山崎 ない。業界がとやかく言う話ではない。

吉村 市長選では「福岡版の時のアセスメントで大規模プロジェクトを一斉点検する」と言っていた。役人的で申し訳ないが、「点検」としたのはアイランドシティが元に戻れないから。見直すと言えば、元に戻す(埋め立てを撤回する)ことになる。それで「点検する」、「時のアセスメントにかける」としてしたが、「引き返す勇氣」という言葉が広がり、あたかも思わせぶりに「元に戻す」という印象を与えたのは痛恨だった。「点検する」ということの意味は、事業計画や資金計画を見直すということだったんですが……。

——博多港の役割や機能をどうとらえていますか。

山崎 福岡市の使命を制する程の大きな存在だ。国にとってもアジアとの流通の一大拠点だ。福岡市の経済や雇用の四分の一を担っている。もっともっと発展策を考えないといけ

ない。

——市長在任中は、北九州市が響灘に大きな港を造るのに一生懸命でした。国としては、同じ福岡県内の博多港に集中投資するのが難しい状況だったのではないですか。

山崎 港湾のあり方は国レベルでしっかり考えるべきテーマだ。アジア戦略を考える時、博多港は重要だ。

吉村 事業の見直しの熟度の問題というよりも、土地が売れるかどうかなんですよね。売れないから、アイランドシティは市政ののどに突き刺さった骨であり続けている。市長時代の見直しが足りなかったといわれれば、足りなかったかもしれない。起死回生できなかった。あのととき、アイランドシティの絵をどう描くべきだったのか。世界的な知恵を集めるのか、博多港開発や市役所という限られたところで考えるのか、と議論した時期がありましたね。一期目の頃だったかな。東京のコンサルタントに現地に来てもらって、IT、医療関係でアジア市場がよく見える人に絵を描いてもらおうか、という話でしたが……。福岡市のアジア戦略は、あるようでない。具体的なものが見えない。中華街の絵も描けなかった。非常に狭いところで考えている。アジアレベルで考えるような器をつくるという発想がいまだに欠けている気がする。

——九〇年代後半、政府が金融機関の不良債権処理に乗り

だした影響で、博多港開発に融資した銀行団は福岡市に一層の支援を要請しました。市は博多港開発が整備する土地を購入することになったわけですが、重い荷物になったのではないですか。

**山崎** そんなことはない。長い目で見る必要がある。

——市役所と銀行の関係は、それ以前の博多リブレイン（博多区下川端地区の再開発事業）の経営をめぐって悪くなつたと聞いています。

**山崎** 市がリブレインから撤退することを決めて、地元銀行は怒っていた。

——銀行との関係が悪化して困ったことはなかったのですか。

**山崎** 私が手がけた事業ではない。申し訳ないという思いがあったのは事実だが、市も多大な出費をし、それを続けることは困難な状況だった。

**吉村** 銀行が博多リブレインの債務の帳消しをかぶることになった。市は損失補償ができないし、税金を出せない。でも、銀行は「市の事業だから付き合っていたのに、うまくいかんようになったら、市はおらんようになるのか」と怒った。今まで指定金融機関との関係はなあなああのところがあったけれど、ドライに貸し借りをしないと痛い目に遭うんだ、と銀

行は学習した。貸したものは返してもらわないかん。それがアイランドシティの見直し時期と重なった。ちょうど金融機関の不良債権処理と重なって、銀行も背に腹を代えられない状況だった。

——昔のように埋め立て地が簡単に売れる時代ではありません。いままでとは違う困難な状況を突破する力は市役所にあったのでしょうか。

**山崎** アジアとの結びつきを強めるために活用すべき土地であると今も思っている。

——事業見直しを振り返って、どう評価していますか。

**山崎** 努力を続けなければならぬが、時間が必要だった。これからも前向きにとらえるべきだ。私は今でもアイランドシティは福岡のすごい財産になると思っている。福岡にとつて大きな宝物ですよ。その他の大型事業についてもやめるべきと考えたものは敢えて中止した。しかし、色々と配慮もしている。武道館機能をもった体育館をやめた代わりに九州電力に相談して、九電記念体育館を市立とし、市民に開放していただいたり、自然動物園はやめたが、今の動物園を旭川動物園などを参考に、もっと魅力あるものにする考えだった。将来おこる負担を削減して、市長在職三年目でプライマリーバランスを達成し、市の財政健全化を実現したと自負してい

る。

### 【DNA運動】

——DNA運動というネーミングは、職員が発案したのですか。

**山崎** 経営管理委員会（市長の諮問機関）の作業グループで、市の若手が議論するうちに出てきたんだよね。

**吉村** そうです。組織の風土を変える運動論を話し合うなかで、「行政マンには変化する遺伝子がないといわれるから、遺伝子を変える改革をしよう」ということになった。「できるから始めよう」と、若い職員が思いついた。DNA運動の名前がついたとき、経営管理委員会の委員は「これは成功する」と言ったんですよ。言葉が斬新で、民間の経営改革をしてきた人たちの琴線に触れた。彼らには職員のチーム作りの発想があった。若い人に自由に考えてほしい、と。そうしない改革がうまくいかないことは分かっている。

——なぜ市役所にDNA運動が必要だったのでしょうか。

**山崎** 企業の社員と行政職員には大きな違いがある。企業は利益を求める。経営者は利益を大きくするために組織をコントロールするし、社員もそれに向かって何をすべきかを考えて行動する。すなわち、目標が明確である。公務員の場合、

それがありませんよ。公務員も目標を持って、明るく楽しくやってもらいたい。結局、市役所の職員の拠り所は市民しかない。市民も市職員を頼りにしている。それに応えて、市民の役に立つてほしい。僕は「市民の方を向いて仕事をしろ」とずっと言ってきた。「君たちには市民しかない。福岡市の主人は市民だ」と。どんな職場でも、市民のことを思い浮かべて仕事をする。そして市民の役に立とうとする、それがDNA運動なんだ。その精神が行き渡れば市役所は変わる。そして市民の信頼も生まれ、市民も変わる。

——その精神は市長を務めた二期八年間で、どこまで浸透しましたか。手応えはありますか。

**山崎** かなり浸透した。区役所の窓口は本当に明るくなった。窓口笑顔が生まれ、応接も変わった。僕の友人も「区役所に行くのが楽しみになった」と言ってくれる。生き生きと仕事をやってくれたんですよ、本当に楽しそうに。だから生き残りちゃうんですよ、この運動は。

——今でも優れた運動だと評価されていますか。

**山崎** 全国に広がっている。今年度も中野区で開かれる全国都市改善改革運動の全国大会と呼ばれている。福岡市が元祖だからその当時の市長である私が呼ばれる。でも、福岡市はDNA運動をやめてしまった。全国に運動の輪が広がって

いるのに、本家本元が無しになった。DNA運動に問題があれば、修正すれば良いものを止めるとは何事だと言いたい。

——職員が市民を顧客と捉えて山崎市長に怒られた、というエピソードが残っています。

山崎 そこがNPM (New Public Management) の考え方と私の考え方の違うところで、市民は顧客じゃない、市の主(あるじ)だ。市民に対して市役所が変われば、市民も変わる。だから私は、これからは地域コミュニティーの活性化だと言ってきた。市民にもまた、主人公は主人公の行動をしてもらわないといけない。その延長線上にコミュニティー政策があった。

——市民から選ばれた市長に、「市民の意識を変えるのが市長の仕事」と言われると……。

山崎 他に誰がおる。

——三期目にどう変えるつもりだったのですか。

山崎 コラボレート、共働の発想を市役所と市民に持つてもらったこと。この問題について行政はこうするから、市民はここまで協力してくれ、と。あるいは、地域住民がここまでするから、行政は協力しろとか。例えば、なんで道路の角地の隅切りひとつできないのか。私道を市が買い上げて道を造ると、みんなが道のギリギリに屏を立てる。なんで引っ込め

ないのか。人が歩きやすいように、なんでできないのか。まさに市が考え方を変える。屏を引っ込めた家は、その費用は市が負担し、固定資産税をかけない、後で市が買い上げる。市と市民が共働してそういう行動を起こすと、ものすごく違う。そのための行動を起こそうと。

市民と行政との関係を明確にしないといけない。憲法も地方自治法も、主権者が市民だと明確にうたっていない。行政マンのためにも、主権者は市民だと明確にうたうべきだと思うね。職員はいまも迷っている。憲法が「(公務員は)全体の奉仕者であって、一部の奉仕者ではない」と書いているので、「一人一人の市民に対しては奉仕者でない」と受け止めてしまう。明確にすべきだ。自治意識を持つ市民を育て健全な自治体をつくっていかなきゃ。そしたら国は救われる。

### 【コミュニティー政策】

——福岡市のコミュニティー政策には三つのポイントがあると思います。町世話人制度の廃止、補助金の一本化、小学校区を単位にした自治協議会づくり。この三つをどういうきっかけで始めたのですか。

山崎 いまの分析はその通りです。経営管理委員会が「行政の最終目標はコミュニティーの自律経営だ」と素晴らしい

提言をしてくれた。その通りだと思いましたがね。市民がコミニティーを自律的に経営できるようにしたい。その仕組みが自治協議会。福岡市の場合は小学校区が単位になる。公民館が各小学校区にあつて、それがコミニティーの核になる。他の大都市にはない特徴なので、これを生かさないといいけないと思ひ、公民館の充実を図つた。

そこで町世話人制度をやめて、自治協議会をつくつて、これまで市役所が局ごとに校区に下ろしていた業務と補助金を一元化するための受け皿にした。校区の全組織の代表が一つのテーブルについて、地域の問題を議論する。それによつて住民の参加を促すというのが目的だつた。町世話人制度は、戦後の町づくりの段階では大きな仕事をしてきた。しかし、現在においては、町世話人が文字通り町の世話をし、住民は人まかせで消極的であつた。町世話人は九〇パーセント自治会長を兼ねており、市から報酬を得ていることを住民は知らないといひ、びつな状態におかれていた。それでは健全な地域自治は育たないと思つた。

——町世話人制度の廃止には抵抗があつたのではないですか。

山崎 あんまりなかつたね。大部分の方はいびつだと考えていたのではないか。しかし、五〇年の歴史を持つた制度を

急にやめたわけで、私に直接ではないが、随分批判があつたようだ。

——選挙への影響はあつたと思ひますか。

山崎 あつたと思うね。市長選に落選した最大の要因は町世話人制度の廃止であつたといわれている。

——当時の議事録を読むと、市議会議員の中にも町世話人廃止反対の人がいました。

山崎 しかし、表だつてはどうか。

——町世話人をはじめとする自治制度への問題意識は、市議会時代から抱いていたのですか。

山崎 二期目の選挙のスローガンは「緑と心のコミニティー」だつた。議員時代は町世話人さんとは持ちつ持たれつの関係だつた。一緒に町づくりに取り組んだ。

——市役所と町世話人の持ちつ持たれつ関係は、具体的にどんな場面に現れますか。

山崎 市役所は市民と直接かかわるよりも町世話人を使うという考えが強かつた。

吉村 市の事業で人を集めなければならぬときに、町世話人に協力してもらおう。チラシを配るとか。何かの情報や事業を地域に広げるときは、やっぱり町世話人が頼りになる。

——今の自治連合会の会長や公民館運営協議会のメンバー

も、自治協議会のメンバーと重なっています。

**山崎** 校区の様々な組織の代表が一つのテーブルを囲んで協議する場だから当然だ。しかし、うまく機能しているかどうかは未知数。

——それを三期目にやろうとしたんですね。

**山崎** 残った仕事はそれくらいやったかな(笑)。自治協議会の機能をどんどん高める。それが僕の三期目の仕事だと思っていた。選挙には落ちただけ、そういう方向に行っていると思う。自治を育てて、自分たちで自分たちの問題を解決しないとイケない。そこで共働という精神が必要になる。市民が「自分たちでここまでやるから、あとは行政でこうしてくれ」というパターンが成り立ちつつあった。それはね、かなり浸透してきたんですよ、地域に。これから本格的に自治協議会の充実に力を入れようと思っていた。特に高齢化、お年寄りが増えると、行政だけでフォローするのは難しい。地域が自治能力を高めるほかない。

——福岡市には豊かなコミュニティの風土があるのですか。

**山崎** そもそもよその人を温かく受け入れる傾向が強い。開放的。そういうのは間違いなくある。それと一校区一公民館が大きい。博多駅のすぐ前にもあり、住民活動の拠点となっ

ている。

**吉村** 「中世の自治都市・博多に学ぼう」という戦略プランも立てた。

——市の資料を見ると、百道浜（早良区）や南区の自治協議会が活発のようですね。

**山崎** 新しいまちはわりと自治活動が盛んになる。白紙から新しい活動の舞台を立ち上げるから。新しいまちの住民も小学校のPTAなどを経験し、仲間ができて、活動が生まれってくるんじゃないかな。お互いを知らない、どうしようもない。横のつながりが必要だね。

#### 【都市づくりの理念】

**山崎** そもそも日本は分権化と分極化を進めなくちゃいけない。東京一極集中では駄目で、それぞれの地方が特色を生かした分極化を図るべき。空港も港湾もその視点に立つべき。空港の問題はアジアの拠点都市を目指す福岡にとって最重要課題。現福岡空港の容量限界による新空港は、私は、かつての雁ノ巣飛行場の拡張を中心に考えるべきだと今も思う。

——新空港にはこだわりがあるんですね。

**山崎** そりゃありますよ。アジアと日本の接点は、福岡が務めるべきですよ。

——今の福岡空港の滑走路増設案をどう思いますか。

**山崎** 何年持つか知らんが、あくまでも暫定措置だ。しかも相変わらず住宅地の上を飛ぶから危険だ。

——海ノ中道（東区）なら、利便性を損なわない二四時間空港になると。

**山崎** かつての雁の巣飛行場の跡地を活用すれば、最高の空港になるはずだ。安全だし、騒音問題も解決する。

——現在の空港の跡地はどうしますか。

**山崎** 公園にすればいい。海ノ中道の国営公園を削るんだから、その代わりがある。都心に公園が出来れば最高だ。地下鉄も都市高速もあるし、いい土地になる。

——空港はアジアとの関係強化に必要なインフラですか。

**山崎** もちろんですよ。福岡はアジアの中心都市であることをアピールする、その意味での五輪立候補だった。財政負担が大きいと反対する人が多かったが、公的な財政はプライマリバランスを維持すればいいんですよ。私は（五輪の事業費は）一千億と言った。開催までの十年間で百億ずつ起債して投資する計画をつくった。年間百億ならプライマリバランスは維持できる。財政の健全性を維持しながらオリピックを開催できることがポイントだった。

——山崎さんは「開発型の桑原市政から転換する」とおっ

しゃっていました。が、本当に転換できたのでしょうか。また、山崎さんは「都市は生きもので、発展か衰退しかない」という哲学を持っていらつしゃいます。が、発展の意味が開発に聞こえます。新空港や五輪の誘致も発展に必要な開発と考えていたのですか。

**山崎** 都市としてのテーマを持っているかどうかだ。テーマとつながった開発は必要だろう。福岡でいえば、アジアとのつながりを強めるための投資は必要だ。五輪についていえば、福岡のような都市で五輪をやれば、すばらしい五輪が出来たはずだ。三三対二二で東京に敗れたが、今でも残念だ。その意味の開発は必要。不必要な開発はぜひぶんやめたよ。

——都市は生きもので、発展か衰退しか……。

**山崎** 絶対にそうだ。現状維持では絶対に衰退する。福岡であれば港湾だったり、空港だったり、税金を頂いておいてインフラも整備しない行政で、何をするの。

——「市民が主役」と言いつつも、そうした大規模プロジェクトは市長が強いイニシアチブを発揮すべきだ、ということですか。

**山崎** そうだね。地域コミュニティーは市民が主役。一方で、行政がしっかりと市民の方を向いて決断することも必要。トップが目の前で市民の世論に振り廻されていれば結果

的には市民を不幸にする。

二〇〇六年に就任した吉田宏市長は「人工島事業の大胆な見直し」をアピールし、人工島で企業誘致や環境共生型都市づくりを進めた。しかし、物流企業の進出撤回に遭うなど、人工島には未利用地が広がったままである。市立こども病院（中央区）の人工島移転計画は、患者や家族から強い反発を受けた。二〇一〇年二月、高島宗一郎新市長が誕生したが、人工島事業は今なお、「福岡市政ののどに突き刺さった骨」であり続けている。福岡市の近未来に必要な「開発」とは何か。議論は決着していない。